

21世紀銘仙～奇跡の復活

21世紀銘仙プロジェクト 発起人 杉原 みち子
発起人 金井 珠代

1. はじめに

明治、大正、昭和の時代に大衆着として、日本全国に普及した絹織物「銘仙」。昭和初期には、北関東の養蚕地域、現在の群馬県「伊勢崎市」、栃木県「足利市」、埼玉県「秩父市」、東京都「八王子市」で、銘仙が大きく花開き、それぞれの街の基幹産業となりました。

一般的に銘仙は「低級絹織物の普段着」という着物文化の中での位置付けです。「銘仙」というひとくくりの中でずっと、どこで生産されたものも同じだと考えられていました。

第二次世界大戦後に機能的にすぐれた洋装文化が米国から急速に入ってくると、カジュアル着だった銘仙着物がどんなに高度な技術で作られたものでも、淘汰されていったのは仕方のない事でした。機屋といわれる製造元が、時代とともに壊滅的に減少し、伊勢崎市の市民の間でも銘仙は、「銘仙織り出す伊勢崎市」の上毛カルタの札に読み込まれている言葉としての認識しか残らないものになっていました。

併用へいようがすり拵最後の製造元「平達織物」の平田達男さん(2010年4月に84歳で死去)と知り合ってから、十数年。前記の生産地の中でも、主に伊勢崎南部地域(旧名和村、旧豊受村)と埼玉県本庄市の伊勢崎に隣接していた地域(沼和田町)の機屋さんしか出来なかった銘仙の技法「併用拵」があることを知りました。この技法は極めて難しく、日本中の織物産地がある中でも伊勢崎独自のものと確信し、平田さんが亡くなってからも、「いせさき明治館」を拠点に紹介していました。2010年3月に杉原みち子さんが「いせさき銘仙の会」を発足、伊勢崎銘仙を残し、伝える活動を伊勢崎市観光物産協会職員として共に始めました。

2013年9月に上毛新聞社がシルクカントリーキャンペーンの絵手紙イベントを伊勢崎市曲輪町の「赤石楽舎」で開催することになり、せっかく伊勢崎で催すのだから、銘仙を飾る協力をしてほしいと依頼されました。

「The・銘仙 里帰り」と題して、福島県にある「日本きもの文化美術館」から30点の併用拵銘仙を借りて展示したところ、あまりの美しさ、緻密さ、図案の大胆さに、ほとんどの来場者は衝撃を受けました。それもそのはず「鯉の滝登り」「蒙古襲来」「エジプトのピラミッド」「軍艦」「万里の長城」などの図柄が鮮やかな色使いで織り込まれていましたから。



GO! 伊勢崎 HPより

上毛新聞社社長の渡辺幸男(現会長)さんも、「これが伊勢崎銘仙なのか」と感激され、同時にこの併用拵の機屋が一軒も残っていないことに落胆されました。そして「今作ることはできないのか、出来るならば上毛新聞社が全面的に協力する」と話されました。「機屋さんは、なくなりましたが、下職と呼ばれる職人さんは何人かいるので、その方たちに協力してもらえれば、出来ないことはない」と答えたのが、21世紀銘仙プロジェクトのきっかけです。

それからの、21世紀銘仙3柄18反が復活するまでの約2年間の軌跡と二人が出会った幾つもの奇跡を、お話したいと思います。

2. 奇跡1・デザイナー須藤玲子さんとの出会い

渡辺社長の申し入れは、私たちにとっても夢であり、目標であったのですが、具体的にはどう動けばいいのか、織物業に携わったこともない二人にとって雲をつかむような話でした。「とにかく職人さんを集めよう、協力してくれる人を集めよう」と掛け声だけの日々に時間は過ぎていきました。

2014年11月に上毛新聞社が高崎商科大学で世界

遺産会議のイベントとして、東京造形大学教授であり世界的なテキスタイルデザイナー・須藤玲子さんの講演を予定していて、講演タイトルは「上州人のつくるテキスタイルが世界を魅了する理由」とのことでした。須藤さんは、桐生に「布」という会社も持っていて、桐生の織物、繊維関係には造詣が深いけれども、伊勢崎には行ったことがなく、まして伊勢崎銘仙がどんなものかも良く知らないのです。下調べに行きたいという申し出があり、講演会の一か月前の10月に運命的な出会いとなりました。



Photo by Shigeki Nakajima

須藤玲子さんのファーストインプレッションは当然ながら「ハイセンスで都会的な人。気取りがなく直球で何でも話し、ものすごく正直で好奇心旺盛なキュートな人」でした。すぐに三人で意気投合しました。伊勢崎銘仙の反物にも興味をもっていたら、伊勢崎銘仙での商品化も

「布」で発表。2015年2月には、友人でもある英国ロンドンにあるビクトリア&アルバート博物館のキュレーターであり、東洋部長のアナ・ジャクソンさんを連れて伊勢崎まで足を運んでくれました。この時は銘仙の研究者でもあるアナさんと一緒に石井捺染所といせさき明治館を見学してくれました。

21世紀銘仙プロジェクト発足に先駆け、二人の中で、復活銘仙のデザインは須藤玲子さん以外には考えられないと上京し、直接依頼しました。結果、須藤さんは社員を交えて20点以上の図柄を提案してくれ、どれもすばらしい図案でした。

その中で二人で持ち帰ったのが7点、プロジェクト参加の職人さんが見て併用拵として作りやすく、より良いと思われるデザインを選択しました。須藤玲子さんデザイン「赤いレンガ造り」「時報塔」、堤有希さんデザイン「ツツジ」の3柄に決定しました。何れも伊勢崎市にちなんだ柄を、無償で提供していただくという驚くべきことが起こりました。



赤いレンガ造り



時報塔



ツツジ

3. 奇跡2・職人さんとの出会い

銘仙の製作は、括り拵、板締め拵、締め切り拵、緯総拵、ほぐし拵、併用拵のどの技法でもすべて分業で成り立っています。併用拵も大まかに分けても14工程もあります。その職人さんがひとり欠けても出来ない織物で、最盛期には分業システムが効率よく働き大量生産ができていたのですが、現状を考えると難儀な織物でした。

私たちが文献や過去の写真でしか見たことがない作業が大半で、実際判っているのは最終段階の手織り作業だけでした。

最初に二人が頼ったのが、織物の団体でした。2015年4月、上毛新聞社の渡辺社長にも直接この団体の役員に会ってもらいました。しかし「併用拵は機屋も職人も道具もなくて、今復刻しようと思っても絶対できないし無理だと思うから、協力はできない」と、あっけなく玉砕しました。あっさりとは断られたことにかえて「銘仙を愛している私たちがなくて、誰がやる!」と奮起しました。この時の事を振り返ると、「知らなかったから、出来たんだね。すべての工程を知っていたら、無謀なことをやってみようと思わないよね」と、断られて当然だったと笑い合いました。

さて、何人かの職人さんとは、顔見知りだったのですが、最初に経糸を作る「整経」そして、つくった経糸がばらけられないように粗く織る「仮織り」の職人さんを見つけなければならなかったのです。

金澤経明さん(78歳) 手織り機の調整

元は機屋さんで二人が十数年来、イベント等でお世話になっていた金澤経明さんは現在、市内で裂き織り

の体験工房を主宰しています。玄人はだしの大工仕事もできる器用な人で、最後まで手織り機の調整、修理を快く引き受けてくれ、なくてはならないアドバイザーです。

大山仙八さん(83歳)・昭子さん(82歳) 整経と仮織り

金澤さんから、整経だったら大山さんしかいないと紹介されて、整経職人の大山仙八さんの作業場を初めて訪ねたのは2015年4月。知識も半端なまま図々しくお願いに行き、何度も「そんなことには協力できない、帰ってくれ」の対応で、諦めかけたことも。「他の整経屋さんがいたら紹介してほしい」と、先に協力を得ていた^{なつせん}捺染業の石井広実さんに聞いてみると、「併用緋の整経が出来るのも大山だけだし、もし他の整経屋でやって持ってきて、大山ん家でやったものでない限り、俺はぜったい捺染はやらない」と言われる始末でした。



仕事の休みごとに、大山整経に通う日々、夫唱婦随で息のあった作業をしている昭子さんに取り持ってもらいながら「あんたのしつこさに参った」と承諾してくれるまで約9か月。心臓にペースメーカーを入れての作業を間近に見ていると、整経が天職、生きる原動力になっていると羨ましい気持ちに何度もなりました。奥さんの昭

子さん曰く「一年中、頭の中は糸の事を考えていて、糸のことが何よりも好きなんですよ」。叱られても、叱られても行くたびに織物の知識や糸のすごさを教えられ併用緋復活の夢がどんどん膨らんでいきました。



実際の整経作業は、経糸の必要本数や長さ、密度を決め、ドラムに平均した張力で巻き取る工程のことです。糸を巻き取ったボビンがセットされるクリールは全体の木枠が弓型に曲がっていて、クリールと^{あやおさ}綾笈との距離

が等距離になるように工夫されています。

取り付けられるボビン数は、最大で縦方向×横方向＝22段×17列＝374個です。今回はその内180個を使用し、綾笈と幅だし^{おさ}笈を通して、ドラムに巻き付けます。反物の横幅で使用する経糸は1,260本。180本を1単位として、7回繰り返しました。(7回×180本＝1,260本)。1回でも、テンションの違う巻き方をしてしまうと経糸の柄が崩れてしまい、併用緋はできません。腕の良い職人の作った整経でなければ、次の分業過程の捺染や製織がうまくいかないことに納得したと同時に、大山夫妻が引き受けてくれたことに、改めて感謝。その後も経糸が一定の幅を保つために、粗くジグザクに織る作業があります。仮織機という専用の織り機で大山さんが仕上げてくれました。

都丸佳男さん(80歳)・高橋千代さん(78歳) 緯糸巻き

併用緋は経糸だけでなく、緯糸も同じ図案を染めなければなりません。緯糸を染めるには、反物と同じ幅の板に糸をまとめて巻く作業があります。「緯糸巻き」です。染色部門の伝統工芸士だった都丸佳男さんがいたので安心していましたが、巻きの作業が始まると、「当時は女性が主にやる作業で自分は監督だった」と軽い告白。それでも1柄は仕上げてもらえましたが、仕事もバリバリ、多趣味で交際範囲が広く「今日は近所の葬式だし、明日も親戚んちが亡くなってそっちに行かなきゃあならねえ」と多忙をきわめ、なかなか作業に来てもらえ

せん。次の捺染作業の石井さんに、染料が日にちを置くと腐ってしまうと言われました。

経糸の染料は合成糊を使いましたが、緯糸はコンニャク糊を染料に混ぜ使用したため腐敗が早いのです。コンニャク粉は少量だと入手が難しく、ここでもJAの知人を介して購入しました。石井さんに事情を話すと「友人がいるから、教えてもらって巻いてみる」と高橋千代さんを紹介されました。

高橋さんは石井さんのかつての仕事仲間だった人で18歳から23歳までのお嫁に行く前の5年間、緯糸巻きの仕事をしていました。約55年ぶりの緯糸巻き、半世紀ぶりのブランクはまったく感じさせない作業を見せてくれました。半日かけて作業工程とコツを教えてもらい、にわか緯糸巻き職人になりました。4本の糸を一本にして巻く作業は、1枚巻くの約10分。短い時間ですが、糸を切らないように左指でじつと同じ調子でつまむ作業は、緊張を強いられ二日間で約30枚。糸を切り、糸口を見つけて繋ぐ作業の連続に気持ちまでもが切れてしまい、改めて高橋さんに依頼し、無事緯糸巻きとの闘いが終了、腰が抜けるほどほっとしました。



高橋さんとの出会いは「地獄に仏」のようでした。

伊藤正義さん(78歳) 型紙彫り

銘仙は友禅染めのように、布にしてから色や柄を染めるわけではありません。織る前の糸に色、柄を付けます。「先染め」です。十字緋や井桁緋は、糸そのものを縛り、縛ったところには染料が入らない仕組みを利用して柄を作ります。染料に直接糸を浸けます。防染の方法です。銘仙では括り緋、締め切り緋を作るときの技法です。一方、併用緋、ほぐし緋、緯総緋を作るためにはすべて切り絵を使った型紙を使用します。版画のように、一色一色違った型紙を切り出し、裏から紗しやという細かい網を張ります。並べた糸の上に型紙を置き、染料を

伸ばし糸染めします。網目から染料が糸に付く仕組みです。これを捺染といいます。銘仙の糸染めでも業種は「紺屋」と「捺染屋」に分かれていたようです。21世紀銘仙は併用緋ですから、当然型紙が必要になります。



元型紙士の経歴を持つ伊藤正義さんとは、十年來の年の離れた友人です。伊藤さんは現代アート作家です。オンリーワンの緻密なきり絵「刀刻」を生み出し、県内外問わず海外にも出品し、数々の受賞を重ねている人で「復活銘仙を作るときには、型紙を彫ってね」と以前から約束していました。一番気安く話せる人だったので、いせさき明治館の中で型紙づくりをしてくれました。

伊藤さんが型紙職人として現役の頃は、型紙は美濃和紙で、柿渋を塗り3枚張り合わせたものを使用したようです。和装文化が衰退した今、型紙用の美濃和紙を作る工場もなくなり、入手できませんでした。仕方なく、洋紙を使用しました。

図案の下にカーボン紙を敷き、図案用紙に写す、小刀で色ごとに「彫る」作業を見せてくれました。半世紀ぶりの型彫りでも、集中力がすごくて、42枚を数週間で仕上げてしまいました。併用の型を彫るには、糸に染料がどれだけ滲むか、専門用語で「泣き」を計算に入れて、彫るのを見ていました。伝統の技とはすごいものです。隣り合う色ごとに原画の線より、内側をどれだけ彫るか外側を彫るか、すべて経験値に基づいたカンです。何でもコンピューターがはじき出してくれる現在ですが、研ぎ澄まされた人間の五感はまだまだ上を行くと実感させられました。

新井ゆり子さん(68歳) 型紙の紗張り

完成した型紙に紗しやという網を張るのは、伊藤さんの芸術家仲間の新井ゆり子さん。新井さんは、沖縄の琉球王朝時代から伝わる伝統的な染色技法の「紅型」びんかたに魅せられ沖縄で修業してきて、現在は伊勢崎各地で広め

ている人です。今回、伊藤さんが銘仙型紙の紗張りを教えるということで、初めて挑戦してくれました。ここでも、昔からあった絹糸で作られた紗が手に入らず、ポリエステル製の紗を使いました。新井さんの自宅工房を借りて紗張りをしたのですが、カシューという糊を薄めるためにシンナーを使います。紅型の型紙とは違い、何倍も大きい型紙に糊をのせていくのでシンナーを何倍も使いました。結果、新井さん、ご主人、愛犬までもが急性のシンナー中毒になってしまうというアクシデントに見舞われ、何日も体調を崩しました。それでも、慣れない紗を張って、剥がれかけてしまう型紙を何度も張り直して根気よく、最後までやってくれました。

石井広実さん(82歳)・茂夫さん(53歳) 捺染

次は、伊勢崎市内最後の捺染職人の石井広実さん、茂夫さん親子の話です。



2015年、須藤さんとV&Aのアナさんを工房に案内する少し前に出会いました。その時は「白内障の手術を明日から受けるので出来ないし、もう仕事も引退している」と気のない返事でした。私たちの本気度を分かってくれ、協力を惜しまなかったプロジェクトの要のような職人さん。大山さんと旧知の仲でお互いに仕事の腕を信頼し合っています。大山さんの拵えた経糸をまっすぐ捺染台の上に据える、約13m。長い白布としか見えない1,260本の絹糸に型紙を使って濃い色から染めていきます。2尺(約75cm)の型紙の上に糊の混じった染料をゴムベラで均等に手早く伸ばしていきます。1反分で19回繰り返し。6色だと114回。親子で次々追いかけるように作業します。ピンと張るような静寂と緊張とが、広く長い作業場を支配し、息を止めて見ている感じです。



緯糸の捺染は、裏側までキッチリ染料が浸透しなくてはならないので丸刷毛を使います。丸刷毛は、鹿毛で出来ていて今では作っている所がなく、貴重なものです。表を全板つけるとひっくり返し、今度は表の型紙と左右反対の裏専用型紙を置きます。ちょっとでも上下がずれてはいけけないので、そおとと板を少し持ち上げては、型紙の位置を合わせます。ピタリと合わせる技術は、80歳過ぎの人とは考えられないくらいでした。経験値とはどんな能力なのでしょう、ここでも神業を見せてもらいました。

清野雪江さん(91歳) 巻き取り

捺染した経糸の「お巻き」を専用の小屋で約一時間蒸して、染料を定着させます。蒸熱作業を済ますと糸についた余分な水分をとる作業「巻き取り」があります。石井さんの長年の仕事仲間の清野雪江さん(じょうねつ)にお願いしました。清野さんは、ご主人と二人三脚で作業をやっていましたが、数年前に亡くなっていましたので、石井さん親子が代わりをしてくれました。

巻き台といわれる大きなかまぼこ型の機械には水が入っていて、下からボイラーで熱します。熱い鉄板の上を染められた糸が通っていきます。この巻き取り台も恐らく個人所蔵のものでは、群馬県内でたった一つの貴重な機械です。



全工程の中で、糸が一番美しく輝く作業で、ため息

がでるほど鮮やかに染められた経糸が見られました。蒸気アイロンをかける作業と同じ効果があります。ボール紙を、経糸がずれないようにタイミング良く入れ、巻いていきます。清野さんの流れるような手先はリズムカルで、職人さん最高齢とは思えない手捌きでした。

戸張佐智子さん(75歳)・磯淳子さん(75歳) パサ返し
織りの前に「パサ返し」という作業があります。板に巻いた緯糸を、1柄ずつのひとまとめ「かさ」に分解する技術です。昔は縁側で、お年寄りが小遣い稼ぎにやった簡単な作業だと聞きました。糸がほぐれて巻き取られていく途中で、新聞紙がパサパサあるいはバサバサ音を立てることから「バサ返し」「バサ返し」といったとの事。



すべての職人さんが揃いプロジェクトがスタートして、しばらくした頃、ある職人さんに「パサ返しは誰がやるん?」と聞かれ、探していなかったことに愕然としました。最盛期に年配だった人がやっていた訳ですから、鬼籍に入っている人ばかりで見つかりません。風の便りにあの人だったら、やっていたかもしれないと何人かに連絡してみても高齢を理由に断られ続けました。ある日、仕事仲間が昔の知り合いにこのプロジェクトの話をしたら、中学時代に母親の手伝いで「パサ返し」をやったことがあるという人を見つけてくれました。幼馴染はもっと手伝いをしていたから、連絡をしてみると言ってくれ磯淳子さん、戸張佐智子さんと出会えました。二人も70歳半ばを過ぎ「5、60年ぶり」に軽やかなパサ返しの音を聞かせてくれました。

福島うた子さん(80歳) 引っ込みと製織
五十嵐幸枝さん(78歳)・吉田勝江さん(76歳) 製織

最後の織り作業、製織ではきわめて優秀な「織姫」さん三人がいました。三人とは、十年前位から面識がありましたので、私たちは心配していませんでした。昔取った杵柄とはいったものの、それぞれが半世紀ぶりの製

織に「できるだろうか」という自問自答があったようです。2016年の7月からいせさき明治館の2部屋を使って、管巻きと製織作業に入りました。最初の1反は1日5時間で約40日。2反目からは8日から10日と驚くべき速さで仕上げてくれました。織姫の長女は福島うた子さん。実は、経糸の綜統通し^{そうこう}箄通しをする引っ込み作業の現役職人です。



1、260本の経糸を1本も間違いなく、綜統の目、箄目に、まるで手先に眼が付いているように、迷いなくサクサクと通していきます。市内の染め織り作家が信頼しているのがうなずける技です。製織は、若い人が織るような力強さと速さがあり、驚かされました。

織姫の次女は五十嵐幸枝さんで、この人も若い頃から織り上手で知られた人です。十年以上前から、市内の小学生に織りを教えるボランティアをしている社交家で、器用で軽やかな織り捌きを見せてくれました。



織姫の最年少吉田勝江さんは、製織部門の伝統工芸士です。7年前まで、平達織物の職人で驚くことに併用^{りきしよつぎ}拵を力織機で織っていた人です。併用拵を初めて手織で織るのをとても心配していましたが、杞憂でした。正

直な性格が織りにも出る、地道で確実な職人技が冴えた反物を作りました。三人の織姫さんはとても仲良しのライバルで、共通点はオシャレで料理上手でチャーミングな人たちでした。

(有)琴平整理

反物を仕上げる「整理」という業種があります。製織をした反物の幅を揃えたり、余分な染料を落したりして商品価値を高める作業です。伊勢崎市内にはもう一軒も整理屋は残っていませんでした。大山さんの助言で、2016年10月から桐生市の琴平整理さんにお願ひし、最後の仕上げをしていただきました。

4・奇跡3・助人、協力者との出会い

プロジェクトには、職人さん以外でも強力なサポーターとの出会いもありました。糸の供給をしてくれた藤田正憲さん。糸の特徴やどんな反物が出来るか、文学者のような静かな話し方でいねいに教えてくれました。親子二代にわたり糸商として、全国の機屋さんには糸の供給をしてきた人でした。今回経糸絹糸は前精練漂白後、大山さんの提案で桐生市にある小池染色でアイボリー系に染色されたものを使用しました。国産の太さが21中(なか)×8本=168デニール、甘諸より(あまろより)です。緯糸は、絹紡糸けんぼうしで太さと撚りはMC 120/2(番手)を使用しました。

このように糸にも本当に色々な種類があり、素人には何を言っているのか?わからないことだらけで「通訳」が必要になりました。ちょうど良い知り合いがいました。桐生市在住の元県職員で長年、繊維試験場に勤めていた織物研究者の新井正直さん(59歳)です。銘仙に興味を持った頃から、色々教えてもらえた師匠のような人です。快く、プロジェクトメンバーに入ってもらいました。

半世紀ぶりの復活の記録も丁寧にとっていかなければなりません。後世に伝えていくためには映像、動画が必要不可欠です。プロをお願いするには正直資金力がありません。上毛新聞社や他の新聞もその時々で取材をしてきましたが、四六時中の取材は無理です。二人にとっても、それぞれの仕事があり、また記録を残す技術もありませんでした。

伊勢崎市の情報をいち早く知るには「Go!伊勢崎」というウェブサイトを見るのが一番です。グルメ情報から建設情報、イベント、自然情報ととにかく多角的、専門

的で温かい目線で紹介されているサイトです。サイトを運営している、ホームページ内ネーム「丸男さん」こと上岡正明さん(66歳)。9年前からの知り合いで、私たちの活動をいつもさりげなくフォローしてくれていました。協力依頼をするとホームページを開設して10年の節目に当たるとのことで、無償で引き受けてくれました。それからの日々ほとんど二人三脚で、どんなところにも同行してくれました。この人は、一見気難しい職人さんと出会っても魔法をかけるように心を開かせ、いろんな話を引き出してくれました。また、技術畑の仕事をしていた人でしたから、機械の構造に詳しく、記録者の域を超えて、サポートしてくれました。方向音痴の運転者(金井)のナビゲーター役も何度も何度も呆れながらしてくれた頼りがいのある助人となりました。出来上がった記録は素晴らしいもので、映像はユーチューブで世界に発信しています。

(<http://www.go-isesaki.com/meisen21.html>)

5・キックオフ(出発式)

2016年1月15日、伊勢崎市曲輪町の北小学校付属の地域交流センター「赤石楽舎」で職人さん、県、市議会議員さん、市教育長さんとたくさんのマスメディアも駆け付けてくれ、約60人で21世紀銘仙「キックオフ」。ようやくスタートラインに立てました。職人さんが一番の主演、スムーズにいくと思われた式は、途中、職人さんと招待者の間でちょっとした言い争いがあり、波乱含みの前途多難を感じさせるものとなりましたが、杉原さんの「難産な子は良く育ちます。きっと併用銘仙は完成します」の声に後押しされた船出となりました。

6・奇跡4・道具との出会い

緯糸巻き機

高木健太さん(26歳)、山田弘さん(71歳)、浩伸さん三人リレー

職人さん捜しと同時に、道具探しの試練がありました。伊勢崎しか出来ない併用緋は、他産地ではない道具が要ります。緯糸を染めるためには、緯糸巻き機という機械が必要でした。職人さんや織姫さんの知り合いを訪ねて、本庄市の機屋さんまで行きましたがありません。もしかしたら、市の民俗資料館に所蔵品があるので

はないかと見せてもらいましたが、空振りでした。この機械がなければ、併用竝を断念するしかありません。切羽詰まって新井正直さんに連絡し、心当たりがないか聞きました。「試験場の隅に廃棄用としてあったような、使えるかどうかわからないけれど…」の返事をもらい、藁をもつかむ気持ちで金澤さんと一緒に見に行きました。



埃をかぶった機械は、一目見て動きそうにもないものでしたが、新井さん、金澤さん、試験場の人たちが、その場で手入れしてくれ可動を確認。後日、伊勢崎市役所の職員が協力してくれ、大山さんの作業場に着地して試運転。翌日、たまたま会った焼きまんじゅう愛好会の会長小杉英雄さんの軽トラで、明治館に運びました。

それから緯糸巻き機との闘いの日が続きました。まず、モーターが200ボルトで使えないことが判明。電気工事関係の仕事をしている甥っ子、高木健太(26歳)にモーター付け替えを依頼し、何度も通ってもらい無事100ボルトに替えられましたが、電源を入れてみると、とても速い回転で危ない。速度を変えるにはプーリーをどうにかして減速するしかなく、またもや途方にくれて1か月半。もう一人の発起人であり、このプロジェクトの広告塔、そして資金調達担当の杉原みち子さんに「もうだめ! だれでもいいから、電気の専門家を連れてきて」と泣きつきました。すぐに身内の会社の山田浩伸課長が飛んできて見てくださいました。「これは俺の分野ではなくて、親父の分野だ」とお父さんの山田弘さんが駆け付けてくれました。

「面白い機械だね、私に任せてください。材料費だけいただければ…私の趣味としていじらせてください。絶対に減速し、安全に動くように直します」と力強い言葉をもらいました。それから、山田さんの奮闘が約1か月続きました。何度も試作を繰り返し、仕上げは安全性を重視して、山田浩伸さんがスイッチを付けてくれ、緯糸

巻き機が半世紀ぶりに息を吹き返しました。



緯糸巻き板

緯糸を巻く反物幅の板が何枚も必要でした。かつては風呂桶を作る職人さんか、家具職人が作ったようです。板の形状も一見単純なようですが特殊で、完全に乾いたものでないと水分を吸ったり、乾いて縮んだりするので使えません。石井さんの同業の捺染職人だった長沼茂さんを訪ね、お借りしたいと話しましたが、やはり「併用は今更出来ないし、失敗するのが目に見えているからやらないほうがいい」となかなかいい返事をもらえませんでした。何度か石井さんに一緒に説得に行ってもらい、約60枚の緯糸用の板を借りてくることができました。

古新聞紙

捺染作業には、古新聞をたくさん使います。今ほどの新聞もカラー面が多く使われているため、染料を定着させるための蒸熱作業で、カラーインクが糸に付着してしまうことがあり、カラー面は使用できませんでした。素人考えで、インクが付いてない新聞紙があるなら最高に使い勝手がいいのではと思いつき、伊勢崎三和町の上毛新聞社印刷工場を訪問、インクが載っていないサラの新聞紙をいただきました。石井捺染所で、最初の1反の下敷きにしてみました。巻き取りの段階で、紙がスツと剥がれず、石井さんの作業リズムが崩れてしまいました。現在の新聞紙は、昔のものに比べ薄く軽量なため、作業に使用するには、難がありました。

結局、石井さんの大事にしている古新聞を使わせてもらうことになりました。黒インクの油が、ちょうどいい具合に作用することが判り、ここでも先人の知恵が生かされていることに驚かされました。

馬場信金箴製作所・藤倉紡織機具店

織り機は、伊勢崎市役所文化財保護課がかつて子

供たちのふるさと学習用に収集したものを3台借りてきました。半世紀以上も使用していない織り機は、金澤経明さんと織姫さん3人が何日もかけ、メンテナンスしました。箆と綜紵は新しいものを使用しないと反物にリードマークという不揃いの縦縞の傷が出来てしまうと大山さんにアドバイスを受けていましたので、新井正直さんに道案内してもらい、上岡さんと桐生と足利まで足を延ばしました。残念ながら、伊勢崎市内には、機織り関係の道具屋さん、一軒ありませんでした。当然、修理を請け負ってくれるところもないのが現状です。箆は桐生市内で創業大正13年の馬場信金箆製作所で、調達。



足利市で創業100年の藤倉紡織機具店では、緯糸を入れる杼(ひ)と綜紵、綜紵枠、篠でつくられている管を揃えることができました。2軒とも全国から注文を受け、親子で受注に答えているところでした。どんなに人間国宝のような織り手が残っていても、織りの道具や修理をするところがないと伝統工芸品は生き残れないと実感し、縁の下の力持ち的な道具職人たちに、もっともっと光が当たってほしいと切に思いました。

7. Go Live (完成披露式)

紆余曲折の銘仙プロジェクト、ようやく着地が見えた2016年12月5日、伊勢崎駅北口にある結婚式場「最高の日」をお借りして「未来に向かって紡ぐ～Go Live」と題した完成式を行いました。

議会中でありながら、昼休みに駆け付けてくれた五十嵐伊勢崎市長、徳江教育長をはじめ、支援者を交えた150人に3柄の反物とピンワークされたドレス、現役高校生の堀川桃佳さんがツツジ柄の振袖を着用して披露しました。振袖は、前橋市在住で和裁の「現代の名工」川岸美枝子さんがボランティアで仕立ててくれました。



プロジェクトの目的の一つであった下職と呼ばれた職人さんたちを表舞台に立たせたいとの願いも叶い、それぞれの手仕事と人となりを紹介することもできました。また、須藤玲子さんを通じて、ビクトリア&アルバート博物館のアナ・ジャクソンさんから、お祝いのメッセージが届き、華やかで和やかな会となりました。

8. 奇跡5・活動資金

このプロジェクトに関わった人たちのほとんどがボランティアで支えてくれましたが、現実問題として最低限の資金が必要です。当初、上毛新聞社の支援に頼ろうと考えていました。打ち合わせを重ねるうちに、二人の考えと企業が支援してくれる手法の違いが明確になり、最終的には、金銭的な支援はお断りする決断をしました。「夢があっても、お金がない!」状態でしたが、言い出しっぺの二人で出し合おうかと話していたところ、いつも活動を共にしていたひとりが、「50万も100万も出せないけれど、私たちも1万円だったら出せます。お二人の努力を何年も見てきて、協力したいって人は他にもいっぱいいますよ」と助言してくれました。

他にも「クラウドファンディングで活動費を集める方法だと広範囲に周知できて、途中で断念した場合も責任が伴わなくて楽ですよ」と、何人もの人から助言をもらいました。話したこともない顔も知らない人から寄付行為を受けるのは、どうしても違和感のあることでした。100人にこの活動を解ってもらえたら、大きな力に変えられる!と考え、活動の目的を精一杯お話したうえで同意してもらい、基本1個人から1万円を寄付してもらうということにし、企業や団体には頼らないというスタンスで始めました。須藤玲子さんからデザイン提案を受けた時

に寄付をいただくという図々しさに、今は恥ずかしい思いをしていますが、ほかにも話を聞きつけ、千葉県からはるばる 1 万円寄付しに来てくれた人、自転車を漕いで寒い風の中を届けてくれた人、体調が万全でないため、ご主人に託して寄付してくれた人、失業中でありながら「どうしても協力させてください」と言ってくれた人等々118人の浄財が励ましのコメントともに集まりました。2016年4月には、上毛新聞社から寄付の申し出があり、足りない分だけということをお話しし、企業で一社だけ寄付をお受けしました。

9. 奇跡7・世界に羽ばたく

2012年から毎年3月には、いせさき明治館周辺で「いせさき銘仙の日」を官民協働で催しています。2017年3月4日に第6回目を開催。



北小学校体育館で行った「銘仙ファッションショー」の中で、完成した21世紀銘仙の3柄をドレスと振袖で披露すると、会場を埋め尽くした800人が大喝采してくれ、今まで以上の反響をいただきました。

無事完成した3柄18反のうち、3柄1反ずつを上毛新聞社に寄贈させていただきました。あとは、併用緋銘仙の知名度をあげる機会があれば披露しようと考えていました。7月下旬、須藤玲子さんから驚くような連絡がありました。英国のV&Aから「赤いレンガ造り」を型紙や原画と一緒に、永久保存したいと申し出があったということです。V&A博物館は、現代美術・各国の古美術・工芸・デザインなど多岐にわたる400万点の膨大なコレクション

ンで知られている世界最高峰と言っても過言ではないところでは。いつも「併用緋銘仙を世界に羽ばたかせるんだ」と杉原さんは言っていました。伊勢崎の人でさえ、併用緋を知っている人が少ない現実に打ちのめされながら活動していたので、内心「プラス思考過ぎるだろう」と悪態をつくこともありました。でも、これは現実です。二人で、いやみんなでこの大きなニュースに狂喜乱舞しました。

さいごに

21世紀銘仙プロジェクトが曲がりなりにも完成し、最後に大きなプレゼント「V&A博物館に永久保存」まで約束されました。平均年齢80歳を超えた職人さんが総結集した結果です。分業はひとり欠けても反物は完成しません。それを考えると伊勢崎に宝物のような職人さんが残っていたのが、最大の奇跡でした。振り返るとたくさんの人に出会い、助けられ、支えられ「併用緋銘仙」を通じ、夢を語り、夢をたくさん見させてもらえました。

大正、昭和の時代に一生懸命、日々の生活を営むために自分の能力のすべてを注いで作った先人の遺品ともいえる併用緋の銘仙着物が、いせさき明治館に今、展示してあります。先人の想いも一緒に背負い、奇跡が起こるたびに、杉原さんが口癖のように「天からの助けだよ、先に逝ってしまった伊勢崎の職人さんたちがみんな頑張れ!って力を貸してくれてるのよ」と。この2年苦しく、眠れない時間も過ごしてきました。でも、二人で思うことは感謝しかありません。職人さんをはじめ、根気よく紙面で何度も過程を丁寧に取材し、掲載してくれた上毛新聞社、各方面から支援してくれた多くのの人に心から感謝いたします。お陰様で、すごく充実した時間をいただき、本当にありがとうございました。

でも、これからが終わりの始まりです。職人さんは出会ったころより、全員が若返りとても元気です。次は、併用緋銘仙の技術を次代に継続していこうと動き始めています。夢は年齢に関係なく広がります。若い人に限らず定年になった人でも、あと30年は頑張れます。須藤玲子さんは全国の職人さんは90歳まで現役の人が大勢いると話してくれました。興味があったら、ぜひ見に来てください。いせさき明治館でお待ちしています。(文責 金井)

※文中の年齢は当時